

カントにおける存在論的デフレ主義

—ニュートンの絶対空間説に対する批判の意義—

片山 光弥

1. はじめに

カントが『純粋理性批判』(以下、『批判』)の「超越論的感性論」(以下、「感性論」)において空間と時間は感性の形式であるとする自らの説を述べたとき、対抗仮説として念頭に置いていたのは、ニュートン的な絶対空間・絶対時間の学説と、ライプニッツ的な関係説だった¹。実際、カントは「感性論」の「解明 Erläuterung」において、両者の学説に対して批判的なコメントを加えている(A39-41/B56-8)。

本論文の目的は、これらの学説への批判のうち、ニュートン的な絶対空間説に対するカントの批判の眼目がどこにあったのかを検討することである²。ライプニッツ的な関係説への批判に関しては、カントがその説をいかなる論拠から批判したのかについて、既に一定の研究がある³。他方で、ニュートン的な学説に関しては、「解明」におけるカント自身の記述が少ないこともあり、カントがその説をいかなる理由で拒否したのか、当該箇所だけでは判然とせず、この点を詳細に明らかにした先行研究は少ないように思われる。本論文はこの状況を前進させることを企図するものである。

カントの絶対空間説批判をめぐる事情をさらに理解しづらくさせているのは、絶対空間説とカント自身の感性の形式説との間に見られる類似性である。カントは絶対空間を(1)物とは異なる存在者でありながら物を内に含むためにのみ存在し、(2)無限であり、(3)それ自体として独立して存在する奇妙な存在者であるとして退けている(A39/B56)。しかし、後に確認されるように、(1)と(2)の特徴はカント的な空間にも認められるものである。したがって、(3)の特徴が問題になるが、その際の主要な論点は、空間という存在者の独立した存在を認めるべきかどうかということに存する。ここで、一般に、理論においてある存在者を不可欠なものとして利用することと、その存在者の存在にコミットすることの間に指摘される密接な連関を鑑みるならば、絶対空間の基本的特徴を引き継いだ理論を用いつつ、そうした空間の存在は否定するというカントの立場は理解が困

難なものになるのではないかという疑念が浮上する。

こうした問題の解決のために本論文は、哲学史的な影響関係は認めづらいものの、カントが空間をめぐる議論においてとった立場に近いものとして、現代哲学における存在論的デフレ主義に注目し、また、デフレ主義の源流の一つであるとされるカルナップの議論を参照する⁴。このことによって本論文は哲学史的な文脈から一旦身を引き、カント自身のテキストからも距離を置くことになるが、これはこうした参照が、絶対空間説批判におけるカントの態度への理解を助ける限りでのことである。

先に結論を素描しておこう。本論文が主張するところでは、カントが絶対空間説への批判においてとった態度とは、「空間はそれ自体として独立して存在するか」という問いに正面から否定的に答えるというものではなく、空間が存在するというものの意味を問い直し、ニュートン的な絶対空間が存在するという主張を無意味なものとして退けるというものだった。これは「経験論、意味論、存在論」(Camap (1956)、以下、“ESO”と略記)においてカルナップがとった態度に近いものである。カルナップはこの論文において、字義通りの意味で解された「～は存在するか」という存在論的問いを回答不可能なものとして退け、代わりに、そうした問いを「私たちは～という種類の存在者に関する語りを受け入れるべきか」という、言語様式の問題として再解釈することを提案している。カントとカルナップの態度には、存在の問いをそのままでは理解不可能なものとして棄却し、代わりに、ある種類の存在者が存在するというものの意味自体を再解釈するという点において共通するものがあり、この点で、カントには空間の存在論において、カルナップと同様の態度を帰属することができる(これを本論文では「デフレ主義的態度」と呼ぶ)。ただし、もちろん両者の立場は同一ではない。特に、カルナップは存在論の問題を言語選択の問題へと変換したが、カントにおいて空間の存在論は、感性という私たちの認識能力の問題へと還元された。この差異によってカントの超越論的観念論は、デフレ主義的という傾向を共有しつつも、ESOのカルナップとは異なる方向へ進むことになる。

本論文の構成を述べる。第2節では、空間をめぐる議論におけるカントとニュートンの関係について論じた先行研究を参照しつつ、カントの立場と絶対空間説の対立に、本論文において「形而上学的」と呼ばれる観点から注目し、その対立におけるカントの立場の中に見られる緊張関係を指摘し、本論文の課題を設定する。第3節では、カントの立場を理解するための手引きになる立場として、存在論的デフレ主義と、その源泉であるカルナップの立場について整理を行う。第4

節では、第3節において得られた視点を携えつつ、絶対空間説を批判するにあたってのカントの態度を「デフレ主義的」と特徴づけ、そのことを通じて第2節で指摘された緊張関係の解決を試みる。第5節ではそれまでの議論をまとめ、本論文が「感性論」研究に対してなす寄与について展望を述べる。

2. 空間をめぐるカントとニュートンの対立

この節では本論文全体の課題を設定するために、次の二つのことを行う。第一に、カントとニュートンの対立に関しては、既に「神学的」および「物理学的」と呼ばれる観点からの対立が指摘されていることを確認しつつ、これらとは異なる、「形而上学的」と呼ばれる観点からの対立に注目する必要性を主張する。第二に、形而上学的観点からの対立に注目したときにその対立を理解しにくいものになっている事情を確認し、第3節以降の議論への動機づけを行う。

2.1 神学的・物理学的・形而上学的観点からの対立

ニュートンの絶対空間説に対するカントの批判に関しては、これまでの研究において詳細には明らかにされてこなかったと第1節で述べたが、より広い観点からニュートンとカントの対立を捉えた研究は既に存在する。そうした研究において指摘されている対立には神学的・物理学的と呼ぶものがそれぞれある。本論文は、そうした研究成果を踏まえつつ、絶対空間説とカントの立場の間には、神学的・物理学的観点からの対立とは区別される、形而上学的観点からの対立が存在すると主張する。

まずは神学的観点からの対立について、先行研究が述べているところを確認しよう。Insole (2011)やFriedman (2013)、Friedman (2020)といった文献は、空間を神の感覚中枢 (sensorium) に喩えるニュートンと、空間を私たちの感性の形式とするカントの立場の連続性を指摘しつつ、ニュートンにおける神の位置を私たち認識主体が占めるようになったとして、ニュートンからカントへの空間論の遷移を説明している。ニュートンもカントも空間を心に依存するものとして捉えたが、神の心から私たちの心へと空間の置かれる位置が移ったことにより、カントは「空間を通じた神の遍在を主張することは、神に空間的な性質を帰してしまうことになるのではないか」という自然神学上の懸念を回避したとされる (Insole 2011, 434, およびFriedman 2020, 286-7) ⁵。

これらの研究は多くのテキスト的な根拠に基づいており、少なくとも神の遍在

の主張に関してカントがニュートンに反対していたということは確かだと思われる。他方で、カントの絶対空間説への批判の眼目が神学的なものに限られるとは考えられない。「感性論」の「解明」における絶対空間・絶対時間説への批判に関して、カントの論述は次のものに尽きているからである。

[空間と時間の絶対的実在性を主張する人々はどうしても経験そのものの原理に反することになってしまう。なぜなら] その人々が（通常数学的自然探究者の党派であるところの）第一の立場に与することに決めるならば、その人々は、あらゆる現実的なものをおのれ自身の内に含むためにのみ（自らはしかし何か現実的なものであることなしに）存在する二つの永遠無限な自存する非物（空間と時間）を想定せざるをえないからである。（A39/B56）

第一の立場に与する人々は、数学的主張のために現象の領域を開放するというだけのことは達成する。これに対してその人々は、悟性がこの領域を越え出て行こうとするならば、まさにこの条件によってひどく混乱してしまう。（A40/B57）

上記引用箇所において「第一の立場」と呼ばれているのが、絶対空間・絶対時間の説に与する立場である。この箇所における批判の解釈は後に行うが、少なくともここに神学的論点への直接の言及はない。これは、カントが絶対空間・絶対時間説を拒否するのに、神学以外の観点における重要な理由をもっていたことを示唆する。

次に、物理学的な観点からの対立について見ておこう。犬竹は、「感性論」においてはニュートンの絶対空間説が正面からは論じられていないとし、カントとニュートンの空間論における対立が表立って生じるのは『自然科学の形而上学的原理』（以下、『原理』）においてだと述べる（犬竹 2011, 142）。実際、カントはニュートンを明確に意識した著作である『原理』において、ニュートンとは異なった仕方で「絶対空間」の概念を導入しており（IV 480, IV 544-6）、ここにカントとニュートンの空間観の対立を見ることは自然だろう⁶。

他方で、「解明」の既に引用した箇所において、少ない論述量とはいえ、絶対空間説への批判がはっきりと述べられている以上、この説への批判的見解を「感性論」から取り出せないとは考えられない。さらに、犬竹自身が述べるように、物質の運動を論じない「感性論」における空間論と、物質の運動の議論を本質的に

必要とする『原理』の空間論とでは、幾何学と力学という、異なった観点から空間が論じられていると見るべきだろう（犬竹 2011, 140-41）。したがって、「感性論」には『原理』における物理学的な観点における対立からは区別された、空間に関する別個の対立があると考えらるべきである。

以上で、先行研究において神学的・物理学的な観点からの対立が論じられていることが確認され、他方で、「感性論」にはそれらとは異なる観点からの対立が存在することが示唆された。この対立を本論文では形而上学的な観点からの対立と呼ぶことにする。「形而上学的」という呼称を用いるのは、後に主張されるように、この対立が空間という存在者の存在論的身分をめぐるものだからである。

「感性論」における絶対空間説批判が、その説が採用する形而上学に対して向けられたものだという指摘は、Domski (2013, 442-3)によって既になされている。絶対空間説と並んでカントに批判される関係説は、主に幾何学的知識をア・ポステリオリなものにしてしまうという理由から拒否されたが⁷、他方で絶対空間説に関しては、それを支持する立場が「現象の領域を数学的主張のために開放するというだけのことは達成する」（A40/B57）とカントによって述べられており、これは絶対空間説が、幾何学の現象へのア・プリオリな応用可能性の説明に関しては利点を有しているとの見方を示しているものとして解釈できる（Cf. Shabel 2005, 46-47, Domski 2013, 440-42, Friedman 2020, 286）。絶対空間が拒否されるのはむしろ、それが「あらゆる現実的なものをおのれ自身の内に含むためにのみ（自らはしかし何か現実的なものであることなしに）存在する二つの永遠無限な自存する非物」（A39/B56）と表現されるような、奇妙な存在者だからである。

このように、本論文が神学的・物理学的な観点からの対立から区別して、形而上学的観点からの対立と呼ぶのは、(1) 物とは異なる存在者でありながら物を内に含むためにのみ存在し、(2) 無限であり、(3) それ自体として独立して存在する奇妙な存在者を受け容れるかどうかという対立だとさしあたりは述べることができる。しかし、対立のこのような特徴づけは暫定的なものにすぎない⁸。なぜなら、以下に見るように、カントが絶対空間という存在者の受け容れを単純に拒否していると考えするには、カントは絶対空間と同様の特徴をもつ存在者へのコミットメントをもつ理論を利用しすぎているからである。

2.2 カントは絶対空間の受け容れを拒否できる立場にあるか

これまでの議論において、「感性論」の「解明」においては絶対空間という奇妙な存在者の受け容れが問題になっていると論じられた。しかし、カントがそうし

た存在者の受け容れを拒否したと直ちに結論づけることはできない。以下、カントにニュートンの絶対空間の存在の否認を単純に帰すわけにはいかない理由について論じよう。

カントは幾何学を論じる際も物理学を論じる際も、物からは区別された無限な空間(2.1節において述べられた(1)と(2)の特徴をもった空間)という、彼がニュートンの絶対空間を拒否した理由となった特徴をもった存在者への言及を必要としているように思われる。まず、「感性論」における空間はまさにそのようなものとして理解されている。

したがって、空間の表象は外的現象の諸関係から経験を通じて借り受けられたものではありえない。そうではなく、この外的経験自体が当の表象を通じてのみはじめて可能となるのだ。(A23/B38)

ここでは空間表象が外的現象とは別の起源をもつことが主張され、したがって、空間の物からの独立性が述べられている。さらに、

空間はある無限な与えられた量として表象される。(B40)

とあるように、カントは空間表象の無限性も主張している。そして、『原理』の物理学の体系は、独自の絶対空間論を含むものとはいえ、『批判』の体系に基づいて構築されている(IV 469-70)。問題は、カントの体系がこうした空間への言及を必要としつつ、かつ、カントがその空間の存在を否認するということが一貫しているかどうかである。ここで、カントは2.1節における絶対空間の(1)と(2)という特徴を引き受けつつも、独立自存するという(3)の点を拒否しているのであり、ある仕方で特徴づけられた存在者に理論において言及することと、そうした存在者の存在にコミットすることは異なるのだから、カントの立場に不整合なところは無いと論じられるかもしれない。しかし、問題はそれほど単純ではない。

ここで生じている問題をより明確にするために、数学的対象の存在に関する不可欠性論証と呼ばれる議論を参照しよう。これは数学的対象に関する実在論を支持する議論だが、空間の存在の受け容れに関する議論にも応用できる⁹。Colyvan(2019)の整理に従うと、この論証は次のような形をしている。

(P1) 私たちは最良の科学理論において不可欠な存在者にのみ、そしてそうした

存在者すべてに存在論的コミットメントをもつべきである。

(P2) 数学的对象は最良の科学理論に不可欠である。

(C) したがって、私たちは数学的对象への存在論的コミットメントをもつべきである。

この議論は、数学的对象は最良の科学理論においては不可欠な存在者なのだから、私たちはそうした存在者の存在にコミットすべきだと述べている。この論証の (P2) における「数学的对象」を「空間」に置き換えたものをカントは受け容れるだろう。すなわち、『批判』や『原理』の体系を前提する場合、空間は科学理論にとって不可欠な存在者となるだろう。加えて (P1) が受け入れられるならば、カントは物質からは区別された無限な空間の存在を受け容れるべきだということになる。

もちろん、(P1) は自然主義や検証全体論といった前提に支えられたものであり、カントがこれを受け容れるだろうとは言い難い。しかし、不可欠性論証は、様々な反論を受けつつも、現在でもその強力さが認められている論証であり (Colyvan (2019) の指摘による)、カントがニュートンの絶対空間に帰した奇妙な特徴をそのまま引き継いだ空間への言及をカントの体系が必要としていることと、カントがニュートンの絶対空間の存在を否認していることとの間に、以上の指摘に基づいて緊張関係を見ることには理由があるといえるだろう。すなわち、カントの立場においてニュートンの絶対空間を退けうるとすることは、少なくとも何らかの正当化を必要としている。

ここにおいて、本論文の課題を次のように明確に述べることができる。カントはニュートンの絶対空間を奇妙な存在者として拒否しているように見える一方で、そうした奇妙な特徴を引き継いだ空間への言及が不可欠な体系を構築している。この事態を整合的に理解可能にするような立場をカントに帰すこと。次節以降では、そうした立場の候補として、存在論的デフレ主義を検討する。

3. 存在論的デフレ主義とカルナップ

本節では、前節で指摘された緊張関係を解消するためにカントに帰しうる立場として、現代哲学における存在論的デフレ主義を検討する。以下では倉田 (2018) に基づいて、デフレ主義について概観しよう。

倉田によれば、存在論的デフレ主義は「存在の問いは世界の構造に関する実質的な問いではない」と主張する立場として特徴づけられる (倉田 2018, 1)。すな

わち、存在論的デフレ主義は、それが存在者の種類や数を減らそうとする立場だという意味でデフレ主義と呼ばれるのではない。存在論的デフレ主義が軽減しようとしている対象はむしろ存在の問いである。本論文の文脈に引き寄せて考えるならば、ニュートンの絶対空間が存在するかどうかを世界の構造に関する実質的な問いとみなさず、そうした問いを何らかの仕方を取り除こうとするのがデフレ主義的な態度だということになる。

倉田は、現代の主要なデフレ主義者の名を挙げつつ、そうした論者たちがカルナップに着想の源泉を得ていることを指摘している(倉田 2018, 1-2)。本論文ではこのカルナップの議論を、ニュートンの絶対空間を拒否したときのカントの態度の説明に役立つ限りで参照することにする。

デフレ主義の文脈において注目されるカルナップの議論は、主に ESO におけるものである。この論文の議論は、数・性質・命題といった抽象的存在者への言及を含む言語の、経験主義者による使用を正当化するという動機に導かれている(Carnap 1956, 205-6)。一般に経験主義者は、感覺的経験の直接の対象ではない抽象的对象への言及を避ける傾向にある。さらに、唯名論者によれば、そのような抽象的对象は、本当は存在しないのだから、そうした対象へ言及するような言語の使用は避けるべきだということになる。これに対して、カルナップによれば、ある語り方を採用するにあたって、その語りにおいて言及される対象が本当に存在するかをあらかじめ議論によって確かめる必要はない。「～は本当に存在するか」といった問いは、カルナップによればそもそも無意味だからである。このことを示すために、カルナップは存在の問い(「～は存在するか」といった形の問い)を内的な問いと外的な問いに分ける。

内的な問いとは、一定の言語的枠組 (linguistic framework) (いくつかの語彙とそれらの用法や意味に関する一定の規則からなる体系) の内部で発せられる問いである。たとえば「100 以上の素数は存在するか」は数に関する言語的枠組を受け容れた者がその枠組の内部で発する問いである。日常的な物に関する言語的枠組に関してはたとえば「私の机の上に白い紙きれは存在するか」といった問いが内的な問いの例として挙げられる。これらの問いには論理的あるいは経験的探究によって答えが与えられる(数学に関しては問いに対する肯定的あるいは否定的な結果を証明することによって、物に関しては簡単な観察を行うことによって)(Carnap 1956, 206-9)。

これに対して外的な問いとは、言語的枠組の外で発せられ、その枠組において言及される種類の存在者がそもそも存在するかを問うものである。「数は存在する

か」や「物は存在するか」といった問いがこれにあたる。形而上学者が問うているのはこの種の問いだとカルナップは考える。しかし、こうした問いは語とそれを支配する規則の外で立てられるのだから、文字通りに受け取ると「数」や「物」といった語は、こうした問いかけにおいては有意味に使用されていない。「数は存在しない」や「物は存在する」といった言明を正当化するための規則も反証するための規則も与えられていないからだ (Carnap 1956, 207)。

したがって、外的な問いを有意味に解釈するためには、「数」や「物」といった語はこの際文字通りに使用されていると考えられるべきではない。こうした問いはむしろ、「我々は数に関する言語的枠組を採用すべきか」などといった、言語的枠組の採用の是非について問うている実践的なものとみなすべきだとされる。そのように解釈された場合、「数は存在するか」といった問いに対しては、我々が数の枠組を受け容れようとする際の目的（たとえば科学的な理論を単純かつ厳密に定式化することなど）にとってその枠組の受け容れがどれだけのメリットをもつかに応じて答えを与えることができる。なお、この際に与えられる答えはイエスかノーかに二分されるものではなく、その枠組がどれだけ便利かに関する、程度の幅を許すようなものである (Carnap 1956, 207-8)。

このようなカルナップの議論から、本論文が「デフレ主義的」と呼ぶ特徴を取り出そう。デフレ主義的な態度ということで本論文が考えるのは、存在の問いを字義通り世界の基礎的な構造に関するものとはみなさず、「～は存在する」という主張の意味を、より理解しやすい仕方で再解釈する態度のことである。カルナップの場合は、「～は存在する」という主張を、「～という種類の存在者に言及する言語的枠組を私たちは採用しており、また、そうすべきである」という、言語様式の採用という実践に関わる問題として再解釈している。

このように、カルナップのデフレ主義的な立場が特徴づけられたが、次節ではカルナップと同様の意味でのデフレ的な態度がカントに帰される。そのことによって、第2節において指摘された緊張の解決が試みられる。

4. カントの立場をデフレ主義的に再構成する

まず、ニュートンの絶対空間を拒否したカントが、最終的に空間に対してどのような見解をとったかを確認しよう。カントは「感性論」において空間を私たちの感性の形式とした。

空間は、外官のあらゆる諸現象の単なる形式、すなわち、そのもとでのみ私たちにあって外的直観が可能となるような、感性の主観的条件にほかならない。
(A26/B42)

ここでは「空間は […] である」ではなく、「空間は […] にほかならない (nichts anders, als [...])」と述べられているから、カントは空間が感性の形式であると主張するばかりでなく、それ以外の可能性を締め出している。このことをもって、カントは空間が感性の形式であるということから、世界に空間的構造が備わっていないと誤って結論づけたとする解釈方針も可能だが¹⁰、ここにおける「空間は私たちの感性の形式にほかならない」ということの含意を、「空間が存在するとは、それが私たちの感性の形式であるという意味である」ととることができるはずばどうだろうか。この場合、「空間はたしかに感性の形式であるかもしれないが、そのこととは別に、世界の側にも空間的構造が備わっている」と述べることは、偽ではなく無意味なことを述べることとなる。

このような解釈方針のもとでは、カントとカルナップの間に、デフレ主義的態度という共通点を見出すことができる。カルナップは「～は存在するか」という外的問いを世界の構造に関する真正な問いとはみなさない。それは字義通りに解されれば無意味な問いである。他方で、「～は存在する」という主張を「私たちは～という種類の存在者に言及する言語的枠組を、そうすべきものとして採用している」という主張として再解釈することはできる。この際、カルナップは「ある種類のものが存在するとは、その種類のものに関する言語的枠組を私たちがそうすべきこととして受け容れているということにほかならない」という見解にコミットしている。このことと平行的に、カントは「絶対空間が存在する」というニュートン的な主張を字義通りには真正の主張とはみなさない。他方で、「空間が存在する」ということを、「空間は私たちの感性の形式である」という主張として再解釈している。この際、カントは「空間が存在するとは、それが私たちの感性の形式であるということにほかならない」という見解にコミットしている。カントは、カルナップと同様に、空間の存在に関する問いを世界の構造に関わるものとはみなさず、私たちの認識能力に関わる問いとして再解釈し、空間が存在するということに、それが私たちの感性の形式であるという意味を与え直している。

カントの立場をこのように解することができるならば、第2節において指摘された緊張は解決する。問題は、カントがニュートンの絶対空間を拒否しながらも、その絶対空間と共通する特徴をもった空間を自らの体系にとって不可欠なもの

しているということだった。今や、本論文の解釈によれば、カントによるニュートンの絶対空間の拒否は、そうした空間の単なる非存在の主張ととられるべきではない。カントに帰すべき主張はむしろ、私たちの認識能力を離れて絶対空間そのものの存在を主張することは無意味だということである。再び「第一の立場に与する人々は、現象の領域を数学的主張のために開放するというだけのことは達成する。これに対してその人々は、悟性がこの領域を越え出て行こうとするならば、まさにこの条件によってひどく混乱してしまう」(A40/B57)というカントの主張を検討しよう。ここでは悟性が現象の領域を越え出て行こうとするとき、絶対空間・絶対時間という存在者を物から区別して指定したことによって、絶対空間・絶対時間説の支持者は混乱に陥ると述べられている。この立場に属する者は、絶対空間・絶対時間の存在を現象としての物から独立に指定したために、こうした奇妙な存在者の存在を字義通り主張せざるをえなくなった。ここで、「悟性が現象の領域を越え出て絶対空間そのものについて何かを主張するとき、それは無意味な主張になる」ということを上記引用箇所からの含意として、本論文における解釈は取り出す¹¹。実際カントは、空間は感性の形式であると述べた箇所の直後で次のように述べている。

私たちはそれゆえ、人間の立場からのみ、空間や延長する存在者などについて語ることができる。もし私たちが、そのもとでのみ私たちが外的直観を受け取りうるところの、すなわち、私たちが対象から触発されるところの、その主観的条件から離れるならば、空間の表象は決して何も意味しない。(A26/B42-3、強調は引用者)

ここでは空間や、その内に存在する延長する存在者について語ることができるのは、私たちの直観に関する主観的条件を考慮に入れる場合に限られると主張されている。そして、こうした条件を無視したとき、空間についての語りは無意味になるとされている。このことこそ、「解明」において、悟性が現象の領域を越え出ていこうとするときに生じると述べられていることだと理解することができる。

以上の解釈のもとでは、カントにとって空間が存在するとはそれが私たちの感性の形式であるということだから、カントは不可欠性論証の結論に反対せずともよい。カントは空間の存在にむしろコミットすることができる。絶対空間説に反対してカントが述べているのは、私たちの主観的条件を無視して「絶対空間それ自体が存在する」と主張することが無意味だということにすぎない。

ただし、ここで留意すべきことがある。これまで、空間という存在者の受け容れに関して、カルナップの議論を手掛かりとしつつ、カントにデフレ主義的な立場を帰してきたが、もちろん、カントとカルナップの立場には相違がある。ここでは特に、次のことに注意しよう。カルナップにとって存在者の受け容れは、私たちが自ら作成して選択することのできる言語的枠組の受け容れの問題だったが、カントの感性の形式にはそのような恣意性は認められない。

カルナップにとって言語的枠組とは私たち自身が作成し、選択するものだから、どのような種類の存在者を受け容れるかについてはある程度の恣意性や改訂の余地がある。他方でカントは空間を私たちの感性のア・プリオリな形式としているから、一度空間に関して採用された信念を後になって改訂することは難しい。この点に関しては、カルナップの立場の方が科学の進歩による新しい種類の存在者の受け容れに対応できるような柔軟性を有しているといえる。

他方で、言語的枠組の恣意性を強調することにはリスクも伴う。新しい種類の存在者の受け容れが私たちによる言語的枠組の恣意的な選択の問題でしかないのだとすれば、どのような種類の存在者が存在するのかは私たちの恣意に左右されることになってしまうからである。他方で、空間などの形式に関する根本的な変更を認めにくいカントの存在論は、より安定したものとなるだろう。

以上、カルナップのデフレ主義的な態度をカントにも読み込みながら、両者の立場の差異にも目を配りつつ、ニュートンの絶対空間への批判に際してカントがとっている立場に関する解釈を行い、第2節において指摘された緊張関係の解消を試みた。次節では本論文の結論をまとめ、それが「感性論」解釈に対してもたらす影響について展望を述べる。

5. 結論と展望

本論文では、ニュートンの絶対空間説とカント自身の立場との間にある、神学的・物理学的観点からの対立からは区別された、形而上学的観点からの対立に注目し、その対立における争点を、絶対空間という奇妙な存在者の受け容れをめぐるものとして特徴づけた。さらに、カントと親和的な立場をとっていたと考えられるカルナップの見解を参照しつつ、カントの態度を、空間の存在の問題を世界の構造の問題と捉えずに、「空間が存在する」ということの意味を私たちの認識能力に関わる観点から捉え直すという、デフレ主義的なものと特徴づけた。この解釈のもとでは、カントの立場は、絶対空間の存在を単純に否定するものではなく、

私たちの認識能力から切り離して絶対空間そのものについて語ることは無意味だと述べているものとして捉えられる。

第4節の議論が示唆するように、カントにおける絶対空間説批判は、空間の超越論的観念性の主張に深く関わっている。したがって、本論文の解釈に基づきつつ、「空間は感性の形式である」という主張自体を精査することで、「感性論」が提示する超越論的観念論という立場自体の理解の進展が期待されるが、これ以上の考察は「感性論」の空間論全体の検討を必要とするため、今後の課題となる。

¹ A23/B37-8を参照せよ。『批判』のこの箇所においてニュートン主義的・ライプニッツ主義的な学説が念頭に置かれているという指摘としては、たとえば Shabel (2010, 97) を参照せよ。

² 本論文が目的とすることは、あくまで絶対空間説批判においてカントがとった態度を明確にすることであって、「感性論」の空間論全体の再構成ではない。もちろん、空間の超越論的観念性といった、カントの空間論の積極的な主張にも言及することにはなるが、これは当該のカントの態度の明瞭化に寄与する限りでのことである。

³ たとえば Shabel (2005, 45-6) や片山 (2020b) を参照せよ。

⁴ 『批判』におけるカントの立場にカルナップとの共通点を見る解釈者としてはバードが挙げられる (Bird (2006, 92-4) を参照)。カントの「超越論的／経験的」の区別をカルナップの「外的／内的」の区別と重ねるその解釈の評価は措くにしても、伝統的な形而上学の問題に対して両者がとっていた態度に類似点があるとするとその見解は本論文の解釈とも調和する。

⁵ ただし、カントの立場がニュートンの立場に対してもつ利点として Insole (2011) が挙げているのは神学上のものに限られず、空間に関する認識論的な論点と、私たちの自由に関わる論点が共に指摘されている。

⁶ カント自身の絶対空間概念の内実を検討することは、すぐに指摘されるように、「感性論」の空間論と『原理』の空間論が分けて考えられるべきである以上、本論文の主題ではない。『原理』におけるカント的な絶対空間については犬竹 (2011, 155-62) や片山 (2020a) を参照せよ。

⁷ カントが空間の関係説を拒否したことについての詳細に関しては片山 (2020b) を参照せよ。

⁸ なお、形而上学的観点からの対立において問題になっているニュートンの絶対空間説は、神学的議論とは切り離されたものであり、ニュートン自身の立場というよりは、もはやニュートンの空間論から抽出されるものにすぎなくなっている。実際、カントは「感性論」の「解明」においてニュートンやライプニッツ個人の名前を挙げているわけではなく、特にライプニッツに関しては、カントがライプニッツ本人の主張とライプニッツ＝ヴォルフ学派の主張を明確に区別していたとの指摘もある (Friedman 2020, 290-4)。ここで問題になっているニュートン的絶対空間説も、ニュートン本人の立場というよりは、広くニュートン主義的な立場として解する方が穏健であろう。なお、こうした絶対空間説は『プリンキピア』における「絶対空間は、その本性からして、いかなる外的なものへの関係もなしに、常に同じ仕方でも存在し、不動のままに留まる」(Newton 1972, 46) という主張等から取り出すことができる。

⁹ ただし、ここで問題になっている空間は抽象的な数学的对象ではなく、物理学においてその存在が仮定されるような空間だから、数学的对象の存在と同様の仕方でもその存在が疑われるわけではない。

¹⁰ ここで指摘されているのは、空間や時間が感性の形式という主観的なものでありつつ、かつ、世界の側の客観的な構造でもあるという、いわゆる「忘れられた選択肢」の問題である。ファイヒンガーの注釈書はこの問題についての整理を含む古典的な文献である (とりわけ、問題の提示に関しては Vaihinger (1892, 134-6) を参照せよ)。

¹¹ フリードマンはこの箇所の記述を B71-2 における自然神学に関する記述と結びつけている (Friedman 2020, 285-7)。B71-2 がニュートンの神学的議論を念頭に置いた箇所だとしても、「解

明」の当該箇所には自然神学への言及が直接見られない以上、本論文が提出した解釈の方が自然だろう。

[凡例]

慣例に従い、『純粹理性批判』の参照の際には、第1版をA、第2版Bとして、それぞれの頁数を記し、『自然科学の形而上学的原理』の参照にあたっては、アカデミー版カント全集における巻数(IV)と頁数をそれぞれローマ数字・アラビア数字で記した。翻訳における[...]は省略を表し、□内に記された言葉は訳者による補いである。

[文献表]

- Bird, Graham, 2006. *The Revolutionary Kant: A Commentary on the Critique of Pure Reason*, Open Court Publishing Company.
- Carnap, Rudolf. 1956. "Empiricism, Semantics, and Ontology," in *Meaning and Necessity; A Study in Semantics and Modal Logic*, 2nd edition, The University of Chicago Press, pp. 205-221.
- Colyvan, Mark, 2019. "Indispensability Arguments in the Philosophy of Mathematics", *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, Edward N. Zalta (ed.), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/spr2019/entries/mathphil-indis/>>.
- Domski, Mary. 2013. "Kant and Newton on the A Priori Necessity of Geometry," *Studies in History and Philosophy of Science*, vol. 44 (3), pp. 438-447.
- Friedman, Michael. 2013. "Newton and Kant on Absolute Space: From Theology to Transcendental Philosophy," in *Interpreting Newton: Critical Essays*, Andrew Janiak and Eric Schliesser (eds.), Cambridge University Press, pp. 342-359.
- 2020. "Space in Kantian Idealism," in *Space: A History*, Andrew Janiak (ed.), Oxford University Press, pp. 280-305.
- Insole, Christopher. 2011. "Kant's Transcendental Idealism and Newton's Divine Sensorium," *Journal of the History of Ideas*, 72 (3), pp. 413-436.
- Newton, Isaac. 1972. *Isaac Newton's Philosophiæ Naturalis Principia Mathematica*, 3rd edition, Alexandre Koyré and I. Bernard Cohen (eds.), Cambridge University Press.
- Shabel, Lisa. 2005. "Apriority and Application: Philosophy of Mathematics in the Modern Period," in *The Oxford Handbook of Philosophy of Mathematics and Logic*, Stewart Shapiro (ed.), Oxford University Press, pp. 29-50.
- 2010. "The Transcendental Aesthetic," in *The Cambridge Companion to Kant's Critique of Pure Reason*, Paul Guyer (ed.), Cambridge University Press, pp. 93-117.
- Vaihinger, Hans. 1892. *Commentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft: Zum hundertjährigen Jubiläum derselben*. vol. 2/2. Union Deutsche Verlagsgesellschaft.
- 犬竹正幸. 2011. 『カントの批判哲学と自然科学 —『自然科学の形而上学的原理』の研究—』, 創文社.
- 片山光弥. 2020a. 「物理法則が経験に先立つとはいかなることか —カント『自然科学の形而上学的原理』における作用・反作用の法則—」, 『論集』, 38, 東京大学人文社会系研究科哲学研究室編, pp. 79-92.
- 2020b. 「カントによる空間の関係説批判と幾何学のア・プリオリな応用可能性」, 『日本カント研究』, 日本カント協会編, 21, pp. 1-11.
- 倉田剛. 2018. 「存在論的デフレ主義を再考する」, 『哲学論文集』, 54, 九州大学哲学会編, pp. 1-18.